
『黒執事?へGO！』

統合失調症無職青年

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

『黒執事？へGO！』

【Z-コード】

Z6556M

【作者名】

統合失調症無職青年

【あらすじ】

平成の救世主正義仮面ゼロこと河村英樹が黒執事の原作レイプに怒り、「黒執事関係者襲撃事件」を起こして三ヶ月後。河村はテレビアーナ「黒執事？」のアロイスの所行に怒りを覚える。そんな河村の前にかつて遭遇した悪魔シユトリが現れ、異世界へ通じる扉を開いて河村を「黒執事？」の世界に案内するという。アロイス・クロード主従を懲らしめるため、河村は旅立つ。

第一章 邂逅

今より数十年か、数百年か、数千年前の「」とは異なる世界。

王座には王が鎮座していた。

「…………よ、俺に余興を用意してくれたらいいな」

配下の者が畏まつて答える。

「ははは、陛下にお喜び頂くため、座興を『』用意致しました」

王の眼前に巨大なスクリーンが現れた。

「何が始まる?」

「は、大虐殺でござります。これより一方的な殺戮が開始されます。陛下には、それをご覧に入れましょう」

「はう。それはまた、面白いな」

ひとつ目の王が進み出て言った。

「恐れながら、陛下に『』上仕ります」

「何だ? 言つてみる」

王は臣下の顔を厳かに見つめた。

「殺すよつも、もつと他にお楽しみ頂ける方法があるかと」

「な、何を言つたか」

座興を用意した臣下などいえば、顔色を失つてゐる。

「どうじつひとい？」

「災害に遭わすのです。されば、奴らの右往左往するさまがご覧にいれます。死は一瞬の苦しみに過ぎず、死んでしまえばもう奴らの苦しむ様を見ることが叶わなくなります。しかし、災害ならば別。幾度も災害に見舞わせ、散々苦しめさせてやればよいのです」

「…………」その方が面白がつたな。うろたえる様子を見るのも、これまた一興」

「お、お待ちください陛下！ 殺されるときの様子はとても言語に述べせるものではござこません！ それを陛下はよく存じのまづです」

「もつこと言つてござるだらうが……」

「しかし……」

王の顔が不快に歪む。

「くどいな。余がそがれた。氣分が悪い。お前はこの俺の命に逆らつた。抗命は大罪、お前の役職を取り上げ、降格処分とする。その顔、見たくもない。しばらく謹慎していろ。近衛兵……」

王の命により、槍を携えた近衛兵たちが臣下を取り囲み、両脇を抱えて連れ出そうとする。

「へ、陛下！ お、おのれー、貴様！ そのままですむと困つなんよ！」

臣が後から王に進言した者を睨みつけるが、王の間から無理やり退出させられていった。

一〇一〇年四月某日。

中年男が机に両手を叩きつけた。

「なぜだ！？ なぜこの私が無視される！？ これだけ活躍しているこの私が！ どうなつてんだちくしょう！ 忘れ去られたといふのか！ 2ちゃんるでも愛称で呼ばれている私が！ そんな馬鹿なことが・・・・・。くわづ！ こんな屈辱、初めてだ！」

「随分とおかんむりだな。何があった・・・・・よっ。」

中年男の顔に驚きが走った。

「な！ 誰だ！ いや、これは幻聴か！ とつとう私は精神に変調をきたしてしまったのか」

「やつではない。そつ思いたくなるのも無理もないがな」

「び、病院に行かなければ……」「

中年男が電話帳を取りに受話器のところへと移動する。

「まあそつ荒てるな」

突如として、電話機が浮き上がった。

「な、なんだこれは！ ポルターガイストか！ お、お前は悪霊なんかか！」

中年男の顔はすっかり恐怖におびえきり、ひきつっている。

「それに近いな。それよりお前、腹が立つてしょうがないことがあつたのだろう？ 僕が力を貸してやらないこともないぞ？」

「どこの誰かもわからない、お前なんぞに」

今度は電話帳が宙を舞つた。

「…………」

「これが俺の力だ。どうだ？ 話してみないか？」「

中年男は思いのだけをぶちまけ始めた。

「どひじてよー、どひじてあたしだけ仲間外れにされるわけ！ も

う、わけわかんないよー。」

若い女がテレビのリモコンを壁に投げつけた。リモコンは破壊され、破片が周囲に飛び散った。

「あたしだってあんなに頑張ってるのに…………あいつめ！ 恥かかせて！ きーつ！」

女は足をじたばたさせ、床を叩く。

「おや、ここにもイライラ人間がいたか

「だ、誰よー？」

女が周囲を見回すが、女以外に他に人はいない。

「お前の味方だよ。お前に協力してやるうとこう存在だ

「ゆ、幽靈ー？」

女の顔が恐怖に歪む。

「当たらうとも遠からずだな。憎い奴がいるんだろう？ 僕がお前に復讐させてやるうとこうのだ？ 悪い話ではないだらう？」

女は心中を吐露し始めた。

第一章 怒れる一ート

メイドが少年主人の世話をしている。しかし、粗相をしてしまう。すると、少年主人はメイドの左眼に指を突っ込み、かきまわした。

「こいつ、なんてことしやがるんだ！　俺の平野綾が！」

一ート・河村英樹はテレビ画面を前に、大声で少年主人を非難した。河村が見ているのはテレビアニメ『黒執事』の第一話「クロ執事」。漫画家枢やな原作の漫画『黒執事』をアニメ化したもので、第一期に当たる。河村は女性声優水樹奈々演じるアロイスという少年貴族が、平野綾演じるハンナへの蛮行に怒りを覚えたのだった。

しかし、怒つてみたものの、河村はそれほど平野のファンというわけでもなかつた。平野の出演作はほとんど見たことはなく、代表作である『涼宮ハルヒの憂鬱』も見ていなかつた。

だが、それでも河村は怒つていた。

「こんな奴が主人公だと？　俺は認めないぞ！　こいつはキチガイ小僧じやねえか！　暴君・暗君・狂君だぜ！　断然シエルの方がましだろ！　制作は何考えてんだ！　俺があんだけ倒してやつたのに、あれは無駄だつたのか！」

河村の怒りは收まらない。シエルというのは黒執事第一期のもうひとりの主人公で、闇の貴族として英国女王の「憂いを晴らす」仕事を行つていた少年貴族であつたが、死亡したのか、二期には登場していない。

河村は三か月前の一〇一〇年四月、テレビニアーメ黒執事が原作をレイプしたと思い、黒執事の出演者や製作スタッフを次々と襲撃した。その事件すらもある人物によつて仕組まれたものであったが、最終的にはその黒幕さえも倒すことに成功していた。

「あー、むしゃくしゃするぜ！　こういつときは、愚痴るに限るな」

河村はテレビを消して、自室に行き、パソコンに手を触れた。知人の廃人無職青年のブログにアクセスする。廃人無職青年もまた黒執事？の視聴者のひとりで、黒執事のファンであった。

黒執事？一話見たが、ひどいもんだつたぜ。アロイスつてガキはとんでもないクソガキでイカれてる。あんなのは降板させて、とつととシエルに変われってんだよ。クロードつて奴も何も咎めないし。主人が主人なら執事も執事だぜ。廃人無職さんもそう思うだろ？

河村は投稿ボタンを押した。

「なぬ！？」

「書き込みは禁止されています」という表示が河村の目に飛び込んできた。

「な、なんでた、廃人無職さん？」

河村は慌てて廃人無職青年と共に通知人であるニート・近藤春雄にメールしてみた。近藤とは一度ある事件でともに戦った戦友同士であつた。

廃人無職青年のブログにコメントできない？ それは当然である。なんせ、ゼロは谷垣をぶつた斬った男だからである。あの男はゼロとは話したくないと思われるのである。

近藤からの返信である。河村は廃人無職青年こと谷垣直人が引き起こした事件を解決する際、谷垣を倒したことがあった。その事件から、まだそう月日は経つていなかつた。

近藤が河村のことをゼロと呼ぶのは、河村が好んでテレビアニメ「コードギアス 反逆のルルーシュ」の登場人物ゼロのコスプレをしているためであつた。

（そういや、そうだったな。でもあれはあいつが悪いんじゃねえか。俺が相手してやろうつてのに、感じ悪いぜ。あー、またむしゃくしやしてきた）

河村はゼロの衣装と一緒に手に入れたプラスチックの剣を手にすると、力いっぱい振り回した。そうせざるを得ないほどイラついて

いたのである。

「アキラ君はお風呂に入らなかったみたいだね。」

河村は吼えた。心の底からの咆哮であつた。しかし、氣分は荒む一方である。

「あー、アロイスの野郎をこの剣でぶつ叩けたらなあ。氣分がすか
つとするのになあ。そんなことにならねえかなあ」

「それが望みか」

1

河村一人しかいない部屋で、男の声がこだまする。

「あ、悪魔か？」

「さすがにものわかりがいいな、河村英樹。そうだ、昔、少しだけ俺と話したことがあったらしい。シユトリだ」

悪魔シユトリは河村が「黒執事関係者襲撃事件」のときに知り合つた存在である。

「何の用だよ？」
俺は悪魔なんか呼んでないぞ！」

「お前の願望、叶えてやるつと思つてな。黒執事？の世界に入りた
くはないか？」

「馬鹿な。そんな」とドヤるわけねえじゃねえか」

河村は鼻で笑うが、完全に否定しているわけではなかつた。

「いや、可能だ。代償は支払つてもらうがな」

「代償？」

シユトロと河村は話し合い始めた。

「えい、えい」

雑木林の中で小学生低学年くらいの男の子がつづくまり、盛んに腕を動かしている。その手には、木の棒が握られている。棒の先には蟻の巣があった。先ほどから男の子は蟻の巣を棒でつついていたのだ。

「おーい、そこのがきんぢょ、悪わせやめろー。」

「？」

腹の突き出た男が向かってくる。

「ありんこをいじめるなー、ありんこだつて生きてるんだー、こんなことはほこの俺が許さんー！」

男の子は棒を捨て、逃げていった。

「これでいいのか？」

仮面をつけずに素顔を晒した河村がシコトリに聞いた。

「ああ。次は駅前へ行け。ほじくりとった鼻くそを道端にポイ捨てする中年男がいるから、そいつに注意して鼻くそを拾わせるのだ」

河村は困惑気味であった。

「「これは何の罰ゲームなんだよ。やりせぬ」」が下りなで過れるぜ」

「無駄口は「」。黒執事？の世界に行きたいのだからつへ。」

「うえつ。わかつたよ」

「おこ」のクソオヤジー。身から出た鼻糞回収しろー。」

「次はパチンコ屋に行け。鼻毛を抜いて息を吹きかけて飛ばす奴がいる。鼻毛回収だ」

「おひ、お前の鼻毛だろー。こんなことに鼻毛捨てんな！」

「今度は眉毛を抜いて飛ばすのが「」

「眉毛なんて抜いてどうすんだー。拾えこのやつー。」

「まつげを回収せよ」

「おこ、まつげ拾えよー。そうだ、お前だよお前ー。」

「耳糞食つてる奴がいる」

「耳糞食つな！汚ねえだろ？がー！見てる人が気持ち悪くなるだろー。」

「鼻糞も食つてるのがいる」

「鼻糞うまいのか食つたことないから知らんが、とにかくやめろー。」

「くしゃみして鼻水を人に飛ばすのがいる」

「ほら、お前の鼻水だ！ 人に飛ばすんじゃねえよー。」

「爪の垢煎じて飲んでる変人がいる。そいつの家の前に行つて怒鳴つてやめさせろ」

「おい！ お前本当に爪の垢煎じて飲んでるらしいな！ 馬鹿じゃねえのか！ どんな偉い人のか知らないが、とにかくやめとけ！」

「うわやんねるとー」「動画中毒になつていい廢人二ートがいる。外から叫んで注意しろ」

「あんまりうちゃんやー」「動ばつかやつてると、リアルじゃ通用しない人間になつちまうぞー！ こいつら邊でやめとけ！ それか時間減らせ！」

「暇さえあれば田那の悪口ばつか言つてる専業主婦がいる」

「お前田那のお陰で暮らしていけるんだろー！ 悪口言つもんじゃないぜ！」

「生身の女ではなく、一次元女しか好きになれなくなつたキモオタがいる」

「おい、人間諦めんな！」

「メタボがいる」

「痩せりー。そもそもないと死ぬぞー。」

「芸能人の追っかけに夢中になり、家庭をおひそかにしている母親がいる」

「現実を見ろおばはん！」

「同じ人間から何度もティッシュをもらつてこいる奴がいる」

「せいい真似すんな！」

河村は走った。走つて走つて走り回つた。全身汗だくになつた。

「ふう。もう、いいだろ？」

河村が汗をぬぐいながら言つた。

「もうだな。今はこれくらいにしどこでやるか

「まだやらせるつもりなのかよ。勘弁だぜ。俺は完全にただの頭がかわいそうな人じやねえか」

「まあやつは言つた。捕まるわけじやなしよ。まあ、家に帰つて支度しそ」

「よひしゃー、ついに俺の新たな冒険の門出とうわけだな。わくわくするわ！」

河村は意氣揚々と帰路を急いだ。

そんな河村の様子をつぶやに見物している者がいた。

「…………様、奴は、河村はどうなりましたか？ もう黒執事？ の世界へ旅立つたのですか？」

中年男の声がその者の耳に届く。

「いや、まだだ。しかし、もうじきそうなる。そういうへ」とはない。奴らが侵入した暁には、すぐさまお前に知らせてやるわ！」

「はい。心待ちにしております」

中年男の目は充血していく、何やら興奮している様子であった。

第四章 王道を行く

河村は家に着くなり、着替えとバスタオルを持つて風呂へと向かった。

「汗かきまくつたぜ。こりゃあ、シャワー浴びねえとやつてらんな
いぜ」

「構わん。好きだけ浴びる」

風呂から出ると、河村は冷蔵庫からポカリスエットのペットボトルを取り出し、氷を入れたガラスについだ。

「水分とらねえとな。熱中症とかこええし。下手したら死ぬらしい
からな」

「飲め飲め」

河村は自室へ行くと、クーラーのリモコンを手に取り、クーラーを起動させる。

「クーラーない時代とか、もう考えられないよな

河村は以前道端でもらった団扇を盛んに仰ぐ。

「・・・・・・谷垣の野郎、何もアク禁区にすることはねえだろ？
あいつが悪いのによお。けつ」

なぜだか知らないが、河村はコメントを投降させなくした谷垣に

対して怒りが沸いてきた。

「おー」

「ん？」

「河村、お前何か大切なこと忘れてないか？」

「あー！ そうだった！」

「思い出したか」

「今日は俺が好きな漫画の新刊の発売日だった！ すっかり忘れてた。助かったよ、シユトリ。ちょっと今から本屋行つてくるわ」

「…………河村」

「ん？ まだ何か忘れてることあつたか？」

「お前、俺のことからかってるのか？ あまつ舐めた真似するなよ」

「な、なんだよ突然」

怒氣を孕んだシユトリの声にたじろぐ河村。

「お前、黒執事？の世界に行くんだろう？」

「！ そつだつたそうだった！」

河村の顔が驚きで満たされた。

「そしてアロイスたちをそのプラスチックの剣で叩きのめすのだろう？」

「そうだぜ」

「なら、準備しろ」

「オーケー。戦闘準備開始だ」

河村は衣裳箪笥からゼロ服を取り出し、身につける。プラスチックの剣も忘れずに腰に差した。

「これを置いてはいけないよな

河村はリュックサックに入れるだけテレビアニメのサウンドトラックを詰め込み、ラジカセを持った。河村はアニメソングやアニメのサントラを聞くと能力が向上、強くなるのだった。

「準備できたぜ」

「よし。トライの前に立て

「なんで？」

河村はきょとんとしている。納得がいかないようだ。

「黒執事？の世界に通じる扉を開くことができるのね、こいつら邊ではここの便所しかないのだ」

「やつこつもんなのか。ない、しょうがないな

河村はトイレの扉の前に立つ。

（ただお前をからかつてるだけだ。馬鹿な奴）

「田を開じて、扉を開け、中へ入れ」

河村はシユトツの指示通りこじした。

木を踏んだような音がした。河村が田を開けると、そこは別世界であった。辺り一面、木々が立ち並ぶ森の中であった。

「ほ、本当に俺は黒執事？の世界にやつて来たのか？」

河村は未だに信じられない様子である。

「本当だ」

「・・・・・」

河村は辺りを見回す。緑一色である。

「シユトツ

河村が問いかける。

「何だ？」

「何でトランシー邸じゃなくて、森の中なんだ？」

河村が疑問を率直に口にする。

「決まってるだろ？ そんな簡単に敵のアジトにたどり着いたら、RPG的ドラマチックな展開が楽しめないじゃないか。常識だろ？」

「お前の常識は知らない。わざわざトランシー邸に飛ばしてくれ。お前の力ならできるはずだ」

「お断りだ。お前は旅をしなければならないのだ、河村。それが王道といつものだ。王道には黙つて従うべきだ。違うか？」

取りつゝ島もないシコトリの態度である。しかし、なおも河村は食い下がる。

「お前の王道も知らない。早く俺を連れて行け」

シコトリは返事をしなかつた。

「…………わかったよ。旅をすればいいんだ。最初はビードルに行けばいい」

「その気になつたか。いい心がけだ。まずはあそこへ行くべきだろうな」

「ビードル？」

「邪の道は蛇。ラウの所だ。奴なり、トランシーヨの場所を知つて
るかもしない」

「はいはい、了解。で、どじをどう歩けばいいんだよ?」

「まずはこのけもの道をまつすぐ行け」

河村はシユトツの指示のもと、歩き始めた。

第五章 墓園の中の観者

河村はけもの道を行く。行けども行けども木々が聳え、草木が繁茂し、鳥のさえずりが聞こえてくる。

河村は早くも現状に苛立ち始めていた。業を煮やしてショトロに訊ねた。

「…………ショトロ」

「どうした？」

「俺もうカツハツ歩いたよな？」

「まあ、やうだな。それが何か？」

「こつになつたら森を抜けられるんだよ？」

「…………やうだな。半日か、一三日か、そこいら辺かな

「半日ー？ 一三日ー？ マジかよー？ ……ふざけんな
ー！」

河村はいきりたつた。

「何をそんなに怒る必要がある？ アロイスを懲らしめたいのだろう？ あのときのお前の怒りはどうへいってしまったのだ？ この程度のこととで、投げ出すつもりか？ 情けない」

「うつ！ しかしながら、そんな何日も歩き続けられた自信は俺にはない」

「気合だ氣合。根性だ。度胸を見せてみる。強靭な精神を以てすれば、越えられぬ難局などない」

「本当かよ……」

「さあ、お喋りは終わりだ。歩け。歩くんだ。日が暮れるぞっ！」

「ちえっ！」

河村は仕方なくまた歩を進めた。

日が暮れようとしていた。

河村の腹が鳴る。

「あー、腹減った」

「河村よ」

「何だ？」

「お前、馬鹿だうつ？」

「だしぬけに何を言ひ出すんだよ？」

「どうしてお前は食糧をもつてこなかつたんだ? ラジカセやロコモコなど何の足しになる? それから、懐中電灯とか、もつと持つてくるべきものがいろいろあつただろう?」

「…」

河村ははたと氣がついた。しかし、時は遅す、あるいは逆に遅す、または

「頼む、家に帰らせてくれ。そしたら、いろいろ持つてくるからさ」

「駄目だ。一度始めた冒険は止められない。それが王道だ」

「また王道かよ。お前のルールはもうこよ」

「お前が家に帰れるとしたら、冒険でしぐじつて死に、魂だけとなつて帰宅するときだけだ」

「死ななきや帰れないのかよ。ひでえな、おこ」

「…………それより、もう日も落ちてきた。暗闇での移動は危険だ。今日はこりひで野宿だな」

河村はきょろきょろと周囲を見やつた。

「森のど真ん中じやねえか。猛獸とか襲つてくんじやねえの?」

「かもな。だとしつも、運が良ければお前は生き残ることができるだろ?」

「…………うええ。テントとかもねえし、文字通り野宿じゃねえか」

「自業自得だな。普通、言われなくとも持つてくれるものだろい。お前は何を考えていたのだ?」

「いや、さくっとアランシーヨに行つて、さくっとアロイスたち倒して、すぐ家に帰つて、本屋行つて漫画買つて家で読むつもりだったが」

「安易な考えだな。物事を甘く考えすぎてる。お前はこつもそうなのか?」

「…………寝るわ」

「寝る」

河村は地べたに横たわった。

数分後。

「空腹で眠れねえ」

「知らん」

「お前アレだ、能力でなんか食いもの出してくれ」

「なんでそんなことを俺がしなければならない？　お前が用意してこないのが悪いんだろ？　お前の失態だ。自分のミスは自分で補填しろ」

「俺が飢え死にしてもいいってのか？」

「それならそれで仕方ないな」

「何て奴なんだ、お前は。悪魔だ！」

河村は大声でシユトリを罵つた。

「だから悪魔だと言つてゐるだろ？」

「くそつ！　なんか食いもの探ししてくる！」

「勝手にしろ」

真つ暗で何も見えない。食料が探せるはずもない。

「くつそー！」

たまりにたまつた不満を爆発させた河村は、闇の中で手探りで食料を探した。何かが手に触れた。どうやら葉のようだった。

もうつづいてでもなれと河村は思い、葉をちぎりて口の中に放り込んだ。苦い味がした。

「そんなもの食べて大丈夫なのか？　無謀な男だな。ある意味、勇敢とも言えるが」

シユトリの冷たい言葉を無視して河村は葉や草と思われるものを次から次へと口に入れた。いくら食べても満腹にはならなかつた。

第六章 土下座男

鳥の鳴き声が聞こえる。河村は目覚めた。朝だった。まだ早朝といつていいだろ？

「起きたか。調子はどうだ？」

「へ、ひひひひひ。は、腹が……」

河村が苦しげに顔を歪ませ、腹に手を当てた。

「だから言つたろう？ 草や葉なんか食べて大丈夫かと」

「ぐ、空腹で仕方なく…………。がむしゃらに食いまくつて何とか空腹は収まり、眠れたのに…………。う、ぐう…………。」

「

「異世界に旅に出るというのに、ろくな準備もせず、水や食料さえももつてこず、無用なラジカセにCDをリコックいっぱいに詰め込み、腹が減つてわけのわからん草や葉を食いまくり、その拳句に腹痛、そして食あたりで死亡」か。それがお前の人生なのか。拍子抜けするほどあっけなく、じじでまぬけな最期だったな。まあ、お前の馬鹿さ加減は見ていて少しば楽しかったが、礼を言わせてもらつほどのことでもないな」

「お、お前、さつきからボロクソ言いすぎだろ。しかも死亡とか。俺まだ生きてるぜ？ お前能力あるんだろ、何とかしてくれよ。…………。」

「今度は何だ?」

「や、やっぱこ。出やつだ。たぶん下痢だ。どひしそー。」

「やうだな、この先を少し降りたところに、小川があるよつだが。
そこまで用を足すといー」

「トイレットペーパーは?」

河村は不安げに聞く。

「お前、持つてきたか?」

「いや・・・・」

「それなら、ないだろ」

「・・・・」

河村は尻を手でおさえながら、恐る恐る移動し始めた。

河村は一生懸命に尻に水をかけ、手でこするよつにして洗つてい
る。下半身は裸である。

「ちよつとした自然破壊をしたな、河村」

「やつたくてやつたんじやねえよ

「野糞とは、都會に住んでいてはできない経験をしたな。これは貴重だぞ？ 一生ものに違いない」

「うるせえよ、お前

河村は狂ったように手を洗つた。

「自分のものじゃないか。何をそんなに気にする必要がある？」

「俺は綺麗好きなんだよ。お前にちこちうるせえのな

「ちいいだらけ。出発だ」

河村はズボンを履き、歩き出す。

「うるせえ？」

「」の雑木林を突つ切る

河村の眼前には雄大な自然が広がっていた。木々がまつまつに立ち並んでいた。

「こんなとこ通れんのか？ 服が木に当たつてしみしみになるんじや？」

「俺の知ったことじゃない」

「けつ。何なんだよ」

「ここを突っ切れば、道に出る。ついでいれば、馬車が通るかもしれない。何とか拾つてもらって、ラウの屋敷に向かうように仕向けるんだな」

「わかつたわかつた

渋々河村は雑木林の中に入つていく。

河村は雑木林を抜け、開けたところに出た。街道である。

「ふう。しかし、よく裂けたな。ビリしててくれるんだよ、これ？」

河村血膚のゼロ服はそこいら中が裂けてしまつていた。

「何か支障でもきたすのか？」

「気分の問題だ」

「なら、問題ないな」

「ちえつ」

河村は何度もかの舌打ちをした。

「まひ、馬車が来る。お前はついてるな。止めて乗せてもらひえ

馬車が近付いてくる。

「日本語通じんのかよ」

「日本のアニメだ、通じるわ」

河村は街道に立ち塞がり、大きく両手を振り、大声を振り絞った。

「おおーい、止まってくれーー！」

「どうー、どうー！」

御者が馬車を止め、河村を見る。

「何だねあんたは？」

「俺は平成の急逝者正義仮面ゼロ！ アロイス・トランシーを倒すため、この世界にやって来た異邦人だ！ 奴の場所を知っているかもしぬないラウという中国人に会いにいきたいんだ！ ラウの館を知らないか！」

御者は困惑を隠さない。

「何を言つているのか、さっぱりわからないよ。今すぐそこをどうしておくれ。旦那様は急いでおられるんだ」

「俺だつて急用だ！ いつまでもここにいられない！ 早く日本に帰つて漫画買つて読まなきやならないんだよー。それに見てるアニメだつてあるし！」

「知らないよ。ここからどうしてくれ

「頼む。この通りだ！」

河村はその場に両手をつき、御者に土下座した。

「乗せてくれ！ ラウのところへ連れてつてくれ！」

「ラウ、モトランシーも知らないよ。まあどいたどいた」

御者が手を払った。

河村の中で激しい怒りが突然渦巻いた。

「この野郎！ 人が土下座までして頼んでんのに、なんだその態度は！ うおおおおおおおおおおおおおおおおお！」

河村は剣を引き抜くや、跳躍、御者の頭を打つた。御者は倒れ込んだ。

「もうこのくちぢやな、河村」

シユトリがにんまり笑つて呟いた。

1

河村に御者が打ち倒されたのを見て、馬車に乗り込んでいた紳士は目を剥いた。河村は扉を開け、ずかずかと馬車に侵入し、剣を紳士に突きつけた。

「お、おいはぎか。か、金なら、全部やる」

「金?
金なんか」

「もらつておけ。後々役に立つかもしね。金はこいつあつても困らないだろ?」

紳士は泡を食いながら、財布を取り出す。

「ああ、ナニだよ、俺はおいまきわ。それもどびきり凶悪な。俺を怒りせむじ、おつれんの身がビリになるかわからねえ。その金せりつ」

河村は自分の口からとんでもない言語が飛びだしてこねりとに分でも驚いていた。財布を受け取る。

「この馬車は俺が頂く。降りる。それから、このことは忘れる。警察になんか言いやがつたら……。ひひひひひひひひ」

河村は悪漢を演じる」とした。

「わ、わかった」

紳士は慌てて馬車から降りると、脱兎の如く駆け出し、逃げていった。

河村は御者を道端に放り投げ、その位置に陣取った。

「俺に馬なんか扱えるのか？」

「やるしかないだろ？？」

河村は鞭を振るつた。

「はいやーー！」

馬車が動き出す。

「道を教えてくれ」

「しばらく行くと分かれ道がある。そこを右折しろ。その先にちょっとした街がある。そこで食料その他を調達、駅もあるから、そこで列車に乗り、ロンドンを田指せ」

「全然着かねえぞ？」

河村はまたしてもイラつき始めていた。

「そういうものだ

「…………俺って御者の資質があるかも。日本に帰つたら、御者にならうかなあ」

「なりたければなれ

「お前もつと友好的になれないのか?」

「俺がお前に協力しているのは、お前が觀察していくそこそこ退屈しない人間だからだ。お前と俺の関係はそれだけのものでしかない。そこを理解しろ」

「へつ

人里が見えてきた。これがシユトリが言っていた街なのだろう。

「さあ、買い出しだ

河村は馬車から降り、散策を開始した。

「コンビニも弁当屋もないよなあ。おにぎりなんかないだろうし、そもそも和食はないよな」

「当然だ

「英語のカンバンばかりじゃねえか。読めねえよ」

「品物を見ればよいだろう。それで察しな」

「へいへい」

河村はパン屋とおぼしき店を発見し、店内に入る。不思議な格好をした河村に店員は面食らつたふうであった。

フランスパンがかかるの中に陳列されている。

「もうこれでいいや」

河村は腕の長さほどのフランスパンを七つ購入した。

「言つた通りだ。金を奪つていて正解だつたろう?」

「ああそつだよ、お前の言つことが正しかつたよ。よかつたよかつた」

「なぜフランスパンなんだ? しかも七個も」

「長いし、太いし、大きいし、なんか腹もちしそうじやん? これ一個で一日はいけるな。七個で一週間分だ。一週間以内にけりをつけてやる」

「そつか」

「駅はどうだよ?」

「人に聞け。たくさん歩いてるのがいるじゃないか?」

河村は中年女性に声をかけ、駅までの道順を聞き出した。

駅に着いた。切符を買い、ホームへ行く。

「早く列車来ねえかなあ。待ってるのは暇だ。つまらん

「暇はいつものことだらう?」

「そりだよそりだよ、俺は毎日が日曜日だよ。それがどうしたって
んだよ」

「事実を指摘したまでだ。そり怒るな」

どれくらいの時間が経過したろうか。列車が駅に入つて来た。

河村はフランスパンを抱えながら、列車に乗り込む。

窓を見た。

「いかにも十九世紀つて感じだな」

初めは新鮮だった風景も、段々見飽きてきた河村であった。

睡魔が襲つてきた。

「やばい、寝くなつてきた

「眠つたら、スリとかに荷物を盗まれるかもな」

「くつそー！ そんなことをせひたまるか！」

河村は目をかゝと見開いたが、所詮無駄な抵抗だった。河村は舟を漕ぎ始めた。

第八章 乞食街

けたたましい音が鳴り響く。列車の汽笛で、河村は目を覚ました。

「気がついたか。もうロンドンだ」

「なんか都合いいな」

「アニメだからな」

河村は列車を後にした。

「これからビーバーをどう行けばいいんだ？ ロンドンは大都会なんだ
う？」

「通行人に地道に聞いていくしかないな」

「なんだそりやあ。お前へのサポートはなしか？」

「ないな」

「・・・・・」

「ほら、聞きに行け。まずは駅員にでもラウの屋敷の居場所を聞いてみるんだな」

河村は駅員に話しかけた。

「知らないじゃねえか」

「片づけしから聞いて回るのだ」

河村はやけくそ気味になつて聞いて歩いた。

数時間が経過した。既に聞いた人数は三桁に上つっていた。

「誰も知らないじゃねえか」

「まあ、あいつは有名人じゃないんだろうな。いいでお前の旅も終わりか。意外な結末だつたな。まさか、ラウの居場所さえ掴めずにジ・エンドとは」

「勝手に人の旅を終わらせるなよ。・・・・・そつだ！」

河村は何か閃いた。

「どうした？」

「お前言つてなかつたか？ 邪の道は蛇つてな」

「ああ。それで？」

河村は速足で歩いていく。路地裏へ入る。

「「」んな場所に行つて危険じゃないのか？」

「あ、い、つはな、一期でなんかやばそなとこに居たんだよ。一期もあつとそだ」

風景が一変し、危ない雰囲気をたたえた人間たちがたむろする空間に出た。どことなく汚れていて、不潔な感じがした。

「乞食たちが薄汚れた毛布に包まつて眠つている。河村は乞食に近付き、搖さぶつて起こす。この世のものとは思えぬ悪臭が鼻につく。」

「お、い、い、起きて乞食ー！」

「？ なんだよ」

「乞食は田をしょぼつかせながら、河村を見つめた。

「お前、ラウつて中国人を知らないか？ 表向きは貿易会社『嵐箭』の英國支店長だが、裏の顔は上海マフィア青幫の幹部の男だ」

「ラウ？ 知らんね」

「ちえつ。また外れかよ」

河村は乞食に限らず、汚い路地裏に居る人間すべてに聞き込みを行つた。

「お、い、あんた」

「うふ？」

河村が振り返ると、シナ服を着た男が三名、立っていた。

「随分「うさん」に「執心らし」いじやないか。何を探つてるんだ？」

（しめたー）

「やつたじやないか、河村。お前が馬鹿みたく騒ぎあわった甲斐があつたとこつものだな」

（ビームでも嫌な奴だな、シュトリ）

「せうだ、俺は「う」に用がある。うに会わせてくれ。俺にまこの世界で果たさねばならない使命があるのだ」

「何言ひてやがる。うがおかしいのか？」

男は自分の頭を指差した。

河村の中でもたしても何かが弾け飛んだ。気がつくと、地を蹴つていた。

「はいやあたたたたたほわけやあひよーー！」

河村の拳が男の顔面に埋まっていた。

「ぐふまおつー！」

男は崩れ落ちた。

「！」のうーー。」

二人目が殴りかかってきた。河村は右へ飛び、攻撃を避け、また飛んだ。

河村の蹴りが二人目の腹に食い込んだ。

「お、おおおおおーー。」

男が地に転がり、悶絶する。

残った一人は呆然としている。河村は素早く近寄り、男の襟首をつかみ、拳を男の頬につけた。

「しゃべってもらおうじやねえか。ラウはビーにいる？ 僕はなあ、あまりの空腹のため、しうがなく草や葉っぱ食つて川で下痢びーしてトイレットペーパーもなくて、しうがなく素手でけつを洗つて、そんなこんなで、ちょっと腹立つてんだ。これ以上俺を怒らせるな？」

男はわなわなと震えだした。

第九章 藍猫との戦いにて、河村英樹死す

「ここがラウの居場所か」

河村は路地裏から随分歩かされた。着いた場所は日の当らない、薄暗い空間であった。まさにそう、阿片窟と呼べる場所であった。人をよせつけない雰囲気を漂わせていた。

「案内御苦労。もう眠つていいぜ」

河村は中国人の首筋に手刀を叩きこむ。男は昏倒した。

河村は奥へと入つていく。

シナ服を着たラウがいた。扇をあおり、涼をとっている。

「ラウ！ 俺は平成救世主正義仮面ゼロ！ 狂人貴族アロイス・トルンサーに懲罰を加えるため、異世界からやつて来た正義漢だ！ トルンサー邸の居場所をさつさと教える！ 俺は忙しいんだよ！」

「ゼロ？ なかなか面白い格好をした珍客だね。謎めいていて、大変興味深い。我的ことを探つていたのは君だね？ そうか。君は彼を止めにきたというわけか。しかし、本物の狂気をどうこうするごとなど、常人にはできはしない。狂える魂は暴れまわるのみ。君はただの傍観者に終始することになる。諦めて元居た場所に帰るといい」

ラウは目を閉じたまま、涼しげな顔で言った。

「何を言うか！俺はここに来るまで、草食つたり葉っぱ食つたり、野糞したり、馬車を奪つたり、いろいろやつてきたんだ！今更引き返せるか！トランシー邸の場所を言え！言つんだ！言わないと、ためにならないぜ？ラウ！」

「はあ。仕方ない。藍猫！」

ラウは開眼し、義妹の名を呼んだ。ラウの背後から、錘をもつた藍猫が現れた。チャイナドレスで身を包んでいる。

「珍客をもてなしてやつてくれ」

「はい、兄様」

藍猫が走り寄つてくる。

河村は余裕の笑みを浮かべていた。

「お前らは知らないだろうが、俺はかつて遊佐浩一と矢作紗友里と戦い、打ち破つた経験があるんだ！俺が負けるはずはないんだよ！さてと、ラジカセラジカセと」

河村は手早くラジカセを置き、リュックサックからCDを取り出し、セジトする。

「よしと。」これで勝利はもう田前だな

藍猫が田と鼻の先に迫つてくる。しかし、いつまで経つてもラジカセは鳴らなかつた。

「どうなつてんだよ？」

河村は不安になつてきた。ラジカセをいじくつまわす。

「じつじつ世界に来る際に壊れてしまつたようだな

ショトリが冷静に説き明かした見せた。

「な、なに！ 僕のラジカセ作戦が！」

藍猫が錘を振り下ろす。河村は慌てて避けた。錘が地面を叩いた。

「ラジカセがねえと、俺は勝てねえ！ くそ！ 動け！ 動けよ！」

河村は手でラジカセを叩いた。藍猫が目が光つた。河村の腹を錘がえぐつた。

「じふおー。」

河村は仮面の中で吐き、地面に跪いた。

「あれれ、随分とあつけなかつたね。大口叩いてたのに」

ラウは拍子抜けしたようだつた。

「つまらないな。残念だよ。もつと楽しませてくれると思つていたのに。もういい。藍猫、その頭に被つているのを取つてやつて。殺していいよ」

藍猫が河村から仮面を剥ぎ取つた。河村は激痛のあまり、何の抵

抗もできなかつた。声も出せない有様である。

「うん、お腹が出てた感じから見てもわかつたけれど、ただの太つたお兄さんだつたね。はい、おやすみ」

藍猫の錘が河村の脳天を直撃した。

河村は悲鳴を上げた。周囲の風景が変化していた。見覚えのある室内。河村は自宅のトイレの前に立っていたのだつた。

「俺は死んだばず」

「ああ、ゲームオーバーだつたな。しかし、殺されたと言つても、所詮アニメの世界での話。ここで死なない限り、お前は死なんのだ。安心して何度も死ねるな。いいだろう?」

「何がいいんだよ。だつたらお前も殺されてみろよな」

河村は不機嫌の極みだつた。

「さて、もう一回挑戦するか？」

「いや。なんか殺されて腹減つたわ。まずは腹ごしらえだ」

河村は床に置かれた紙袋を見た。フランスパンが七個入っている。

「あつちでゲットしたものも、持り帰れるんだな」

「ああ。いいだろ?」

河村はフランスパンを手に取り、かぶりついた。

「うまいか?」

「普通」

河村は一心不乱にフランスパンを食つた。やけ食いと言ふた。

第十章 約束の力

ラウは予想外の事態に心底驚いていた。

「どういひことだ？ なぜ死体がない？ 消えたといつのか？」

河村敗死をつぶやに見物している者がいた。

（河村は敗れたか。しかし、これで終わりではないだらう。奴は何度でも黒執事？の世界に侵入し、戦いを挑んでいくだらう）

「河村は、河村はどうなりましたか？」

中年男が聞いてきた。

「奴はラウと接触したが、トランシーに関する情報を聞き出せなかつたじかりか、藍猫に叩き殺されてた」

「死んだんですか！ やつた！ やまあみろー！」

「喜ぶのはまだ早い」

「なぜですか？」

「あの世界でいくら死んでも、しきりの世界で死なない限り、本当の死は訪れないのだ」

「なんですよ！？ ちっくしょつ！ 河村め、くたばらないのか…」

「だが、ひとつだけ方法がある。お前たちの協力が必要だがな。それは・・・・・」

河村はフランスパンを一個食べ終えると、歯磨きを始めた。

（しかしあれだな、ラジカセが使えないとなると、どうすりつやいいんだ？）

「至つて簡単だ。お前が歌えばいいだろ？」

（お、お前、人の考えが読めるのか！？ 聞いてねえぞ。それに俺は歌歌うのはうまくないんだよ）

「お前が聞かなかつただけだ。これから女とデートに行くわけでもないのだから、歯磨きはそれくらいでいいだろ。トイレの前に立て」

河村は口をゆすぐ、洗面所に吐き出す。

「あいつらに勝てる気がしない。奴らは裏世界のプロだからな」

「お前のお得意のなんとか拳をお見舞いしてやればいいじゃないか。これまで幾人も敵を倒してきただろ？」

「これまでの敵は素人が多くつたけどな。そうだ！」

河村はリュックサックからCDを取り出し、ラジカセにセット
ングした。

「何をする気だ？」

「今聞くんだよ。そしてテンションが上がってきたところであつちに行く。そういうや、樂勝だぜ」

「ほい。もうか。やつらのなら、そうすればいい

僕等 空高く君を守つてくれ

強さ
夢たのいの羽で

温もりを教えてくれた 悲しみを拭つてくれた

愛情は君の手のひら
滲んだ空に
未来を想うた

河村が流した曲はムツクが歌う「約束」、テレビアニメ「閃光のナイトレイド」のオープニングテーマだ。

河村は腰の剣を引き抜いて、トイレの前に立つた。

河村は藍猫の眼前に移動していた。

「今 僕等 空高く君を守つてく 強き僥幸のこの羽で 限りある明日への記憶 サヨナラは君の腕の中 どじまで行けるだろ？ 遥か遠い夜明け 深く息を止めて最後の約束さ」

河村は歌詞を呟きながら、藍猫に斬りつけた。藍猫は河村の突然の出現に驚愕していたが、その剣を受け止めた。

「お前は！ 今までビリにいたというんだ！？」

ラウは河村に驚きの視線を送る。

「ゼロは滅びぬ！ 何度でも蘇る！」

河村が笑顔で言った。その笑みは仮面に隠れてラウと藍猫には見ることはできなかつたが。

「な、何だと？ どういつ意味だ？」

今度は謎めいた台詞が多いラウが面食らつ番だった。

河村は激しい斬撃を次々と藍猫に送った。藍猫もそれについてきている。

河村は藍猫の右手首を強く打つた。能面のよつた藍猫の表情に初めて感情が表現された。痛みで歪む顔。

河村は藍猫の動きが鈍った隙をつき、藍猫の肝臓を狙つて突いた。藍猫が崩れ落ちる。

「藍貓！」

ラウが壁に立てかけてあつた青竜刀を手に取つた。

「よくも藍猫を倒してくれたね。ただの太つた男だと思っていたが、
我が間違っていたようだね。私はシマを荒らす者に容赦しないよ」

ラウと河村は対峙し、激しく睨み合つた。

第十一章 「おかしな奴に負けるなんてね」

ラウは地を蹴つた。河村に斬りつける。河村は剣で受け止めた。

テウの書籠刀が半分ほど河村の劍に食い込んだ。

アラスチックじゃ銭には勝てねえか！ せー！」

ハスチャケ: 何のことだい?

河村は剣を捨て、藍猫の鎧を捨て上げた。再び河村をラウが襲う。河村は何とか鎧で攻撃を防いだ。

「アーリンて何のこと?」

ラウの疑問を無視して、河村はまたも歌い始めた。

「夢のつづき 追いかけていたはずなのに
曲がりくねつた 細い
道 人につましく」

河村が口ずさんでいるのは、YUIが歌う「REVIVER」、『鋼の錬金術師 FULLMETAL ALCHEMIST』のオープニングテーマ「a gain」である。河村の好きな曲のひとつだった。

二人は激しく競り合つた。鳴り響く金属音が戦いの激しさを物語つていた。火花散る戦いである。

河村の動きが加速する。

ちいしいいい！」

ラウが苦虫を噛み潰したような顔をして舌打ちする。手が痺れてきたのだ。

「もーっ たあああああああああああああー！」

河村はテウの右肩を打つた。

- ۱۰۰ -

テウの手から畫竜刀がこぼれ落ちた。

「どうだ！」

河村は鍾をテウの鼻先に突きつけた。

「我の負けだよ。君、なかなかやるね！」

「ああ、喋つてもひもひじやねえか。アロイス・トランシーフの居場所を吐け」

「あのれあ」

ラウが右肩をさすりながら言った。

「何だ?」

「我、アロイスとか知らないんだけど。・・・・・誰?」

「・・・・・悪い予感はしていたが、まさか予定調和のオチだつたとはな。無駄足だつたか」

河村の顔が悔しそうでこじわ。

「まあ、レーヴィーともあるわ。気にしないことだ、河村」

シコトリが口を挟んできた。

「お前、いうなることは最初からわかつてたんじやないのか?」

「いや、私は予想外の君の強さに驚きを隠しきれないでいるよ」

「お前に言つてねえよ、ラウ。レーヴィーの話だ」

「?」

ラウは腑に落ちない。

「結局、振り出しが。次はゼリ行けばいいんだよ」

「我に聞かれても」

「ラウは困惑していた。

「だからあ、お前に言つてないって」

「じゃあ誰に言つてるんだい？ ゼリは我と君しかいないのよ。」
あれかい、何かの病気なの？」

「うめせえなあ、お前は黙つてろよ」

河村はラウに苛立つていた。

「だつて君が独り言を言つから」

「ああそつだよ、どうせ俺はおかしいんだよ、どうだ、これで満足
か」

河村は面倒臭げに言い放つた。

「おかしな奴に負けるなんてね。藍猫ともっと鍛練を積まないと
けないな」

「賑やかで楽しそうじゃないか、河村」

シコトリがちやちやを入れる。

「こいから、じつあるんだよ」

「ラウで駄目なら、次は葬儀屋だな。奴は裏世界の情報に精通している。その道のプロだ。トランシーについても何か知っているだろう。今度は収穫があるはずだ」

「葬儀屋か。おい、ラウー。葬儀屋の店に行く道順を教える!」

「葬儀屋か。知ってるけど。今度は彼を倒すつもりなのかい?」

「必要ならな」

河村はラウから道順を聞き出しそと、踵を返した。

「ゼロ、君の行く手にはかつてないほどの困難が待ち受けているだろ。それでも君は、歩みを止めないつもりなのか? 後悔するところになるかもしれない」

ラウが河村の背に語りかけた。

「後悔? そんなもん、二ートになつたときから、ずっとしてるぜ」

「二ート? 君は我が知らない単語ばかり使つんだね。いったい何者なんだ?」

「俺は平成救世主正義仮面ゼロ。正体を明かさないのが、ヒーローの法則つもんだ。じゃあな。邪魔したぜ」

「ヒーロー……」

河村はラウから見送られながら、走り出した。

河村の姿が葬儀屋が営む店の前にあった。

「今度こそ情報を掴まねえとな」

河村はドアノブに手をかけ、店内に入った。無人である。

「おーい、葬儀屋、いねえのか？」

河村は声を出しながら、店内を見渡したが、人の姿はない。

「ヒッヒッヒッヒッ、小生に何か御用かね？」

棺桶が開き、葬儀屋が姿を現した。

「うわっ！ お前なんつうとこから出てくるんだよ。びっくりするじゃねえか。俺が心臓発作で死んだらどう責任とつてくれるんだよ」

「小生が棺に入れて、丁重に弔つて差し上げるよ。さすがに墓参りまではしてあげないけどね」

「縁起でもねえこと言いやがって。…………そんなどうだつていいんだ。俺はアロイス・トランサーの館がどこにあるか知りたいんだ。頼む、教えてくれ」

「蜘蛛か。館の場所なら、小生は知ってるよ」

「本当か！」

河村が田を輝かした。

「でも、ただとはいかない。小生に極上の笑いを提供してくれたら、教えてあげよ!」

「そういうえば、お前はそういう奴だったな。極上の笑いか。俺には難しいな」

「そうか。な、この話はなかったことになるね。小生はもうひと眠りさせてもらひよ」

葬儀屋は棺桶の扉を閉めようと扉に手をかけた。

「ま、待つてくれ! 今言つからせ!..」

河村は棺桶の扉を掴んだ。

「早くして欲しいな。小生の大切な昼寝の時間を奪わないでくれ」

河村はしばし考え込んだ。

「やつぱり駄目だ! 僕には笑いの才能はない!..」

「話は終わったね」

葬儀屋は再び扉を閉めようとする。突然、河村は土下座した。この世界に来てから一度目の土下座体験であった。

「葬儀屋! この通りだ! 僕はマジキチ貴族アロイスを倒さねば

「笑わせてくれないんだつたら、教えないよ。小生も慈善事業をやつているわけではない。他をあたつてみることだね」

トランシー邸がどこにあるか、教えてくれ！頼む！」

「笑わせてくれないんだつたら、教えないよ。小生も慈善事業をやつているわけではない。他をあたつてみることだね」

葬儀屋の冷たい仕打ちに、河村の堪忍袋の緒が切れた。

「葬儀屋、てめえ！この俺がこりうまでして頼みこんでいるの、それをいとも簡単に断りやがって！あつたまきたぜー！こんな店、俺がぶつ壊してやる！」

河村は錘を振り上げると、棺桶を掛けて振り下ろした。棺桶に錘が食い込み、木の破片が散らばった。

「な、何をするんだ！」

葬儀屋は仰天していた。

「今言つたら？ぶつ壊すつて。聞こえなかつたか？俺を怒らせたら、こつだ！」

河村は一発目を放つた。また棺桶の破片が飛ぶ。

「やめろー！」

葬儀屋が河村に掴みかかった。

「はいやあたたたたたほわちやあちよー！」

河村は葬儀屋の腹に飛び蹴りをお見舞いした。

「ぐほつー。」

葬儀屋の体が吹き飛び、壁に叩きつけられた。

「早く言わねえと、店がめちゃくちゃになつります？ それで
もいいのか？」

河村が三発目をまわに繰り出さうとした時、

「待て！ 教える！ トランシー邸の位置は・・・・・・」

葬儀屋はトランシー邸の場所を喋った。

「行き方は？」

河村は道順をも葬儀屋から聞きだすと、その場を後にした。

「ここからけつじつな距離があるよつじやないか？ 歩いていくつ
もりか？」

「まさか。またアレをやるしかないだろ」

河村は大通りへ出た。ひつきりなしに馬車が通る。河村はそのひ
とつに田をつけると、走り出した。

「おーい、止まつてくれ！」

河村は馬車の前に仁王立ちとなり、大きく手を広げた。

「何だあんた、物乞いか？ 何も恵んでやるものはないよ。ひとつ
とやこをあけるんだ」

御者が河村に冷たい視線を送りながら言った。またも河村は激怒
した。

「この野郎、人をいきなり乞食扱いしやがって！ なめんじゃねえ
！」

河村は飛翔し、御者の胸に飛び蹴りを見舞った。

「おおつー！」

御者は苦悶の表情を浮かべている。

「降りろ！ひー！」

河村は御者を道端に放り出すと、馬車に乗り込み、乗客も錘で脅
かして追い払った。

河村は再び御者となつた。馬を操り、トランシー邸へと向かつた。

第十一章 いんな一言も台詞のない脇役キャラにやられてたまるかよ！

河村の一度目になる馬車強盗を目撃した観察者は歓喜の声をあげた。

「喜べ。もうすぐ俺たちが拵えた劇が、クライマックスを迎える。」

中年男の顔も喜びに浸っている。

「ああ、実行しなければならないだろう。そしてお前の切なる願いも成就される」

中年男の全身に震えが来た。歓喜の震えであつた。

「ついに！ついにあのにつくき河村英樹を葬ることができる！私はどれだけこの日を待ち焦がれたことか！この二ヶ月間の苦悩が今、取り払われる！・・・・様、あなたさまには何とお礼を申し上げてよいものか、見当もつきません」

「礼など不要だ。俺は俺の理由でお前に加勢しているだけだからな。それより、計画を実践しろ」

「はい！」

中年男はパソコンに向かい合つた。

「見えてきた！ あれがトランシー邸か！」

河村の目に豪華絢爛な大豪邸が入って來た。

「そのよつだな。さあ、お前の旅を終わらせるんだ」

「当たり前だぜ」

河村は馬車をとめ、降りると、玄関に向かつて走り出す。

莊厳な扉の前に河村は立つた。

「……」アロイスやクロードが…………

河村は思わず生睡を飲み込んだ。

「どれ、そろそろ俺も登場してやるか」

河村は片を叩かれた。振り返ると、ナージには痩せきすの全身黒ずくめの青年紳士が立っていた。

「！ 誰だお前は！」

「俺だ。シユトリだ。人間如きに姿を見せるのは久方ぶりだ。有り難く思え」

「何だよ、今更何しに来たんだよ

「見物に決まつてゐるだろ？　気が向いたら手助けしてやる」と
もないが

「けつ。好きにしろよ」

河村は扉に触れた。押せども引けども扉は開かない。

「鍵がかかつてゐるやうだな。どこでる」

河村をどいた瞬間、扉が邸内に吸い込まれていった。

「お前何やつた？」

「」なんもの、いわゆる朝飯前という奴だな。いいから行け。アロ
イスビもを懲らしめるんだろ？

河村は邸内に侵入し、大声を発した。

「おいやロイス！ それにクロード！ それから三つ子ども！ 僕
はアロイスのハンナに対する蛮行に怒りを感じ、異世界からお前ら
を懲らしめにやつてきた！ 僕は平成救世主正義仮面ゼロ！ 僕は
逃げも隠れもしない！ そして不死身の男だ！ ラピュタ同様、何
度でも復活する！ さあ、出できやがれ！ 僕は早く漫画の新刊が
読みたいんだよ！」

河村の声に応えるよつて、三つ子が姿を現した。それぞれ髪型が
違つ。

「出てきたな、三つ子子ども！」

「お前は何者だ？ ここのトランシーの紋に泥を塗りに来たのか？」

声の主はクロードである。

「泥？ ああそうだ、泥塗りまくつてやりに来たんだよ。俺は平野綾のファンじゃねえが、それでも、あんなことは許さねえ」

「平野綾？ 誰だそれは？ ・・・・日本人の名か？ お前、日本人なのか？」

「ばれちゃあ、しょうがねえ。俺は日本男児だ。大和魂もつてゐるぜ」

「東洋の小さな島国の人間が、わざわざ田那さまを懲らしめるために、ここの大英帝国までやってきたというのか。ここの苦労な話だな」

「そうだよ、俺はここまでくるまでに苦労したぜ。まず最初に着いたのが森の中で」

「トンプソン、ティンバー、カンタベリー、こいつを殺せ。後始末も忘れずにな」

「おい、まだ俺の話が終わってねえぞ。人の話は最後まで聞けよ」

文句を言つ河村に、三つ子が襲いかかる。三人は同時に飛び、空を舞つた。河村を蹴りを食らわそうとする。

「おわつー！」

河村は逃げだした。三人は河村が立っていた場所に着地する。間をおかず河村に走り寄る。

「三対一とは卑怯だぜ。おレシュトリ、俺に味方しろ」

「まだそれほどピンチとも言へんだろ。それに俺は見物するのが好きで、当事者として関わるのはあまり気が進まんのだ」

「！」の薄情者めー！」

河村がシュトリを罵る間も、三つ子は河村に迫つてくる。

「トンプソン、ティンバー、カンタベリーはただの使用人などではない。トランシー家の使用人だ。甘い考えは捨て去ることだ」

クロードが無表情で告げた。

「くつそー！ こんな一言も台詞のない脇役キャラにやられてたまるかよー！」

河村は必死で戦う術を考え始めた。

三つ子がみるみる距離を縮めてくる。

「何してゐる河村？ 歌はどうした？ 忘れたのか？」

「おお！ そうだった！」

河村は息を大きく吸い込み、口を開いた。

「たとえ… 終わる事の無い悲しみがあなた奪つても 離れてゆく心
など此處には無いと言つて 駆け寄つた背中に問いかける明日がど
んな形でも 携るがなかつたのはもう信じる事を忘れたくなつた
から」

河村が歌つてゐるのはテレビアニメ「黒執事？」のオープニング
テーマ「SHIVER」である。河村の眼の色が変わつた。

「つおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
ワーダー！」

河村は三つ子に向かつて駆けていく。三つ子のひとりが河村に拳
を放つた。河村は的確に見切り、回避する。一步足を踏み出し、錘
で頭を殴打した。一人目の三つ子は床に昏倒した。

一人目は河村に蹴りを送つて來た。これも正確に避けた河村は、
二人目の喉を狙つて錘を突き出す。一人目も喉を押さえながら、床
に転がつた。

三人目は蹴りと拳を交互に混ぜて攻撃してきた。しかし、主題歌パワーによつて強化された河村の敵ではなかつた。三人目が床を蹴つて飛翔した時、河村も遅れて飛んだ。二人は空で対峙した。

河村の錘が三人目の股間をえぐつた。三人目はあまりの激痛に耐えかね、まともに着地できず、床に激突し、気絶した。

「これがアーツンパワーだ！ 俺の強さがわかつたか、クロード！」

河村は得意顔でクロードを見つめた。しかし、三つ子の敗北を目にしても、クロードの顔に変化の兆しはない。冷淡さが伝わってくるその無表情に、河村は少しざわえた。

「な、なんだよお前、なんか言つたらどうだ？」

「下らん。たかが使用人を三人倒したくらいで、有頂天になるとは。無頼の輩は皆、お前のような男ばかりなのだろう。軽薄にして浅薄にして単純にして短絡的。要するに、お前は馬鹿だ」

「なんだとてめえ！」

パチパチパチ。

突然として、場違いな拍手が巻き起しつた。拍手の主を河村は見た。

「いやあ、凄い。凄いよ。このトランシ一家の使用人を一度に三人も倒すなんてね。ゼロって言つたつけ？ 君は凄く強い。いい見世

物を見せてもらひたよ

「お前はー！ アロイス・トランシーー！」

アロイスは笑っていた。自分の使用人が倒されたにも関わらず。

「うん？ 呼び捨てはいけないなあ。僕は仮にも伯爵なんだからさ。伯爵閣下、伯爵閣下と呼ばなきや。君の行為は貴族に対する不敬に当たる。不敬漢だよ、君は」

「誰がお前なんぞに閣下をつけるか！」

「ふうん。そういう」と言ひちやうんだ。・・・・・・・・あ、そつか、君は僕を懲らしめにやつてきたんだつたよね。懲らしめられるよくなことしたかな、僕？ ねえクロード、僕なんかやつた？」

アロイスは微笑みながらクロードを眺めた。

「いえ、旦那様はそのようなことはなさつておりません」

クロードがアロイスに深々と頭を下げる。

「クロードはああ言つてるよ」

「アロイスでめえ、お前ハンナの左目失明させたじやねえか！ 僕はあのシーンを見て、平野綾ファンでもないのに怒りを感じ、ここまで来たんだよ！ わかったかこのクソガキが！」

「ああ、あれか。あれねえ。あれってそんなにいけないことなの？ だってハンナは僕の使用人じやない？ いわば僕のために存在す

る玩具みたいなもんだよね。飼い主・持ち主である僕がどうしようもないと、僕の自由じゃないの？」

アロイスは笑みを絶やさない。

「お前何様のつもりだ！ 人を玩具みたいに言いやがって！ お前の様なキチガイは俺がこの手で倒す！」この平成救世主正義仮面ゼロがな！」

「ねえゼロ、君は自分で救世主とか正義とか言つてて、恥ずかしく思つたことないのかな？」

「うむせえ！ 僕にいちいちケチつけんな！ このキチガイクソガキ！ ストッキングみたいな靴下なんか履きやがって、お前が腐女子・腐男子狙いまくりのキャラなのは先刻承知なんだよ！」

「あれは冷え症だから履いてるだけだよ。フジヨシやフダンシって何？ ・・・・もういいや。あーもう、なんか相手するのが疲れてきたよ。この変てこな格好した男を、今すぐ僕の前から消し去つてよ、クロード。不愉快極まりないよ。もう限界」

アロイスが不快げに眉を寄せて言つた。

「イエス、マジエスティ」

いつの間に握ったのか、クロードの手には金色のナイフとフォークが握られていた。無造作に河村に向けて放つた。

「うおわっ！」

河村は床に伏せた。河村の頭上を金食器が通過する。

「金ぴかのナイフとフォークなんか使いやがって、とんだ成金趣味野郎だぜ。悪趣味だとは思わねえのか?」

クロードは河村の問いに答えず、第一撃を放つた。

第十五章 河村英樹は一度死ぬ

河村は左へ走った。金食器が床に突き刺される。クロードは攻撃の手を緩めず、次から次へと金食器を投げる。

河村は走った。とにかく走るしかなかつた。走りながら、飛んでくる金食器を鎌で叩き落しもした。

「こんな太っちょ相手に、いつたい何分かかってるんだよクロード。僕はいつまで田の毒を我慢していればいいの？ 早く！ 早く殺して！ 殺せ！」

アロイスが頭を搔き廻る。

「申し訳ございません、田那様。今片付けてご覧にいれます」

クロードがアロイスに一礼する。

「早くしてよー。」

クロードの金食器を投げるスピードが劇的に速くなつた。走る河村の右足に金食器が突き刺される。

「くわいてえ！」

河村は足を引きずりながらクロードの攻撃をさけようとするが、時すでに遅し。河村の体を次々と金食器が襲つた。両足、両腕、腹、胸、手の甲、両肩、あつとあらゆる場所に金食器が深々と突き刺さつていてる。

「終わりだ」

一瞬でクロードが河村の目の前に移動していた。

「…」

河村は喉に暑いを感じた。喉に金のナイフが突き刺さっていたのだつた。

「またゲームオーバーか」

ショトリの呆れた声を最後に、河村の意識は薄れていった。

「…」

河村は再び自宅のトイレの前に立っていた。

「お前はまたも死んだのだ。自分でわかるだろ？」

「ちい…・・・・・クロードって奴は強敵だぜ」

「あいつも悪魔だからな。人間じゃない」

「何か！ 何かないのか！ 奴を倒す方法が！」

「さあな。自分で考えることだな」

「悪魔に効く呪文とか武器とか、教えてくれよ」

「断る。ネットで検索してみたらどうだ?」

河村はショトリが言った通り、ネットで調べてみることにした。

「やうか！ そうだったのか！」

河村は何か発見をしたようだった。

「何かわかったのか？」

「ああ。これで奴を倒せるぜ。ショトリ、また頼む。移動する場所はロンドン中心部にしどいてくれ」

「トランシー邸ではなく?」

「やうだ。よろしく」

河村は急いでトイレの前に立った。

河村はロンドンの大通りに居た。

「まずは宝石店を探さないとな

「宝石なんか何に使うんだ?」

「まあ見てるつて」

河村は道行く人に宝石店の場所を聞いた。

宝石店につくなり、河村は店員に銀をありつたけ買いたいと言いだした。店員が銀をもつてくると、その店員の頭を錘で殴つて気を失わせた。駆け足で店を後にした。

「お前、強盗するのが好きになつたのか?」

「まさか。これもクロードを倒すための作戦だぜ。さつきの店員には気の毒なことしたけどな」

河村は大通りを歩く。河村の目に、警察官の姿が入つた。河村は近付いていく。

「おまわりさん、あつちの人気のない通りで喧嘩してん奴がいるんです。止めてやつて下さい」

河村は警察官を人気のない場所に誘い出すなり、錘で鳩尾を突いた。警察官は地を這つた。警察官から拳銃を奪い取る。

「お前やはり、強盗が趣味になつてしまつたんじゃないだろうな?」

「違つて言つてるだろ。馬鹿な」と言つなよ

河村は次に鍛冶屋の場所を聞いて回った。

鍛冶屋に着くなり、河村は錘で鍛冶屋を脅した。

「これで銀の銃弾を作るんだ！ この拳銃の口径に見合ひ弾をな！ 作らねえと承知しねえぜ！」

待つこと数時間、河村は銀の銃弾を十数発手に入れた。

「これで完璧だ。準備万端、整った」

河村はにんまりと笑った。

第十六章 銀の銃弾

「ショトリ、俺をトランシー邸へ運んでくれ。今度こそクロードを仕留めて見せるぜ」

河村が意氣軒高に言い放つた。

「大した自信だな。それが単なる勘違いでないことを祈るばかりだ」

「クロード！ あいつはどいつもいたんだよ！ いないじゃないか！」

アロイスの叱責が飛ぶ。

「私にもわかりかねます。しかし、喉元にホークを突き刺しました。あれは致命傷になるでしょう。おそらく、もつ生きてはいないかと」

「人を勝手に殺すなよな」

クロードの前に河村が現れた。

「お前は！ なぜ生きている！ 先ほどまでどいつもいた！」

「ちょっとお前を倒すための下準備をしていたのさ」

クロードは河村が拳銃を手にしているのを確認した。

「そんなものが私に通用するとでも？」馬鹿な男だな

「旦那様」

クロードがアロイスの言葉を遮った。それ以上喋るなといつ言外の含みである。

「へー、撃たれても死なねえのか？」
「前ら一人で俺を担ごうって魂胆か」
「それはさすがに嘘だろ？」
お

「話してもいい？」

「避けるじゃないの？」

「私は避けたりはしない。」ここに断言する

「ああ、そう、じき、遠慮なく撃たせてもらうわ」

トランシー邸に銃声が轟いた。河村は全弾を撃ち尽くした。弾はずべてクロードの心臓付近に吸い込まれていった。

「ノルマニ」

クロードの顔色が変わった。苦悶に歪んでいた。ついに両膝をついた。

「どうしたクロード！ 何が起つたんだ！」

アロイスがクロードに駄け寄る。

お前！」の彈はあやか

「銀の銃弾だ。吸血鬼や悪魔に効くってどつかのサイトに書いてあったんだよ。正解だつたみたいだな」

「クローデ、しきかりしてよー！ クローデー！」

アロイスがクロードに抱きついた。

「旦那様、これまでのよひです。こんな形で別れる」となつて申
し訳・・・・・ぐねつー。」

クロードは絶命した。

「お前、よくもクロードを！ 許さない！ 絶対に許さない！」

アロイスが河村に向かって走つてくる。その目には涙が浮かび、河村に対する憎悪に燃えていた。

河村は床を蹴つて飛んだ。

河村の飛び蹴りがアロイスの胸に食い込んでいく。

「ベーリー！」

アロイスは一メートルほど吹き飛ばされ、床に背中を叩きつけられた。アロイスは失神した。

「終わったな。それでは、偉大な勇者の御帰還といこうか」

一部始終を見物していたシユトリが言った。

「ああ。漫画の新刊買わなくちゃな」

「 · · · · 河村 」

「何だ？」

「扉が開かない」

「なにー、」んなときには冗談はやめてくれよな

「いや、「冗談ではない。本当だ」

「…………どうすんだよ！ 帰れないだと！ なんでだ！」

「原因は不明だ」

「ハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハ！」

突如として河村たちを嘲笑う哄笑が響き渡った。

「だ、誰だ！」

「私がね？ 私は河村英樹、お前に深い恨みを抱く者だ。私が誰だ
か当ててみる。お前も私の名は知っているはずだからな」

「俺が知ってる人間？ …………誰なんだよ」

河村は顎に手を当てて考え始めた。

「はあはあ、シエルはあはあ・・・・・・・・」

近藤春雄は「黒執事?」第一話のラストでシエルが登場したシーンを見、興奮状態に会った。何を隠そう、この一ートはショタコンなのであった。近藤の本棚にはそれ系の本で埋め尽くされていた。

今はまだましな方で、ショタコンの本能が強く刺激された時、近藤は強い行為に及ぶことも多かった。

近藤は第一話を見終わると、大きくため息をついた。

「ふう」

(終わってしまったのである。気になる終わり方であった。これは視聴者をむずむずさせる制作側の戦略に違いないのである。しかし、そうはわかつていても、春雄は完全にその術中にはまってしまったのである。とにかく、とにかく早く続きが見たいのである。次回はシエル・セバスチャン回なのである。・・・・・他の人はどう思つていいのだろうか? 検索である)

近藤はパソコンを立ち上げ、グーグルで「黒執事?」と検索をかけた。すると、トップ項目に「黒執事?の世界にもつと漫つてみませんか」というのがあった。

(これは何なのだ? 早速クリックである)

近藤はマウスを動かした。そのサイトへアクセスした途端、パソ

「ン画面からまばゆい光が発せられた。

(ー 何が起こったのであるー)

近藤の意識は途絶えた。

「どうだ？ 私の正体がわかつたか？」

「わからぬえ。お前いつたい誰なんだ」

「わからないか。それでは仕方ない。フラウロス様、お手数をおかけしますが、私の姿を河村たちに見せてやって下さい」

「フラウロスだと？」

シユトリの顔に陰が走った。

「私も一緒に映して下さいね」

突然、若い女の声が割りこんできた。河村はこの女の声に聞き覚えがあった。

「この声、どつかで聞いたことあんなあ。誰だろ？」

河村たちの前に巨大スクリーンが突如として出現し、そこには一人の男女が映し出されていた。中年男と若い女である。

「初めてだな、河村英樹。私は竹田青滋！ TBSにその人あ

りと言われる名物プロデューサーだ！ 竹Pといつ愛称で視聴者に愛されてもいい！」

「竹田青滋といやあ、SEEDやハガレン、エウレカセブン、コードギアスとかの企画者じやねえか！」

「まだまだ甘いな、河村！ 私が関係したアニメは、他に機動戦士ガンダムSEED DESTINY、BLOOD+、天保異聞妖奇士、地球へ…、DARKER THAN BLACK 黒の契約者、機動戦士ガンダム00、灼眼のシャナII（Second）、マクロスF、バスクッシュ！、DARKER THAN BLACK 流星の双子、戦国BASARA弐。…・…・…そして忘れてならないのは、黒執事一期と二期の企画もこの私であるという事実だ！」

竹田の顔がゆでだこのように真っ赤になった。

「え！ お前黒執事の企画もやつてたの？ 知らなかつた」

「…・…・… 河村英樹、お前はかつて、ゼロのコスプレをして黒執事の出演声優やスタッフを襲つた。そのとき、私は仕事で外出中で難を逃れたのだった。しかし、私の不運はそこから始まったのだ！」

竹田の脳裏に事件後、被害スタッフの発言が蘇る。

「そういえばさ、竹田さん襲われてないよね。何でだろ？」

あの人、意外に存在感薄いから、犯人も忘れちゃったんじゃ
ないの？

そういうこと言うなよ。本人に聞かれたらどうすんだよ。ま
あでも、あの人はラッキーだったよな。

「河村、お前にそのときの屈辱がわかるか！ あれだけのヒット作
の制作に参加していながら、忘れ去られ、無視されたという現実。
これほど辛く、無念なことがあるか！ 私はお前によつて生涯拭い
去ることのできない恥辱を受けたのだ！ 絶対に許さん！」

「竹田さん、私にも喋らせて下さってよ」

隣の女が竹田の肩をつづいた。

「やうだつたね。すまない。君もびうだ

「」のクソ二二、よく聞きなさい！ 私は田村ゆかり、黒執事シ
リーズでヒリザベス・ミッドフォードを演じていたの

「ああ！ リジーの声だったのか！ 気付かなかつた

「「」のデブキモオタニート！ あたしもあんたのおかげで大恥かかされたのよ！ あんた、あたしも黒執事に出演した声優のひとりなのに、襲わなかつたでしょ！ そのせいで、あたしも竹田さんみたいに襲われた声優さんから言わたんだから！ もづ最悪！」

「襲われた方がよかつたとか、おかしな女だな

「うつわーー 「」のボケなすが！」

「これは私たちの復讐なのだよ！ 河村、お前はもつそこからこの世界に戻ることはできなくなつた。一生をそこで過ぐすことになる

「マジかよー？」

河村は事態の深刻を痛感せざるを得なかつた。

第十八章 ルシファー・ノート

「フラウロス、なぜ黙っている?」

それまで口を開ざしていたシュトリが発言した。

「クククククククククククク、そんなに俺に話して欲しいのか、シユトリ。よからう。ならば語つてやう。あれはいつのことだったか、魔王陛下の御前で、お前は俺を貶めた。そのために、俺は役職を解かれ、階級も下げられたのだ」

「そんなこともあつたな。確か、お前の策ではある蟻の集団を別のそれに襲撃させ、一方的に殺戮すると言つ話だつたが、俺はそれではあまりにつまらないと思い、魔王陛下にその面申し上げたのだ。そのためこ「んなことを?」

「そんなこと? そんなことだと! ? ・・・・まあいい。俺はあの日からお前への復讐のために生きてきた。そんなときだよ、何でも願いが叶うというルシファー・ノートの存在を知ったのは

「お前はそれを今手にしてるといつわけか」

「そうだ。ルシファー副王陛下に何度も何度も懇願して、やつと手に入れたのだ」

悪魔フラウロスはそのときの様子を思い出していた。

ルシファー・ノートを貸してほしい？ 何言ってんだお前、
これは俺様専用だよ、貸せるわけねえじゃん。まあ、どうしてもつ
て言つんなら、あれだ、とりあえず、ザリガニ殺してこいや。六六
六万匹くらいかな。それだけ殺して来たら、半貞だけくれてやるよ。

「気が遠くなるような年月が経過した。私はようやく六六六万匹の
ザリガニを仕留め、それを副王陛下に報告した」

「へ？ ザリガニ六六六万匹殺してきたって？ 何の話だ？」

「副王陛下は完全に忘却してしまつていた。私は粘り強く話をし、
陛下に約束を思い出させることに成功した」

「ああ、あれね。思い出したわ。ほい、半貞くれてやる。 . . .
. . . 話は変わるんだけどさ、今度地球のヨーロッパ地方のドイツ
で国のも、ひとりの青年に憑依したりして操つてやろうと思つてん
だよ。そいつに大暴れさせて、地球は大騒動になる。大勢人も死ぬ。

ドイツ人てのは勤勉で真面目、インテリのイメージだから、そんな奴が出てきたら、もう永遠にトラウマ抱え込むことになる。楽しくなるぜ。

「ルシファー・ノートを半真手に入れた私は、お前たち一人がどるべき行動を書き込んだ。黒執事？の世界に一人揃つて侵入するようにな。俺が書いた筋書き通りだ」

「何だよ、俺はお前ら悪魔の確執に巻き込まれたってことかよ。勘弁だぜ」

河村が不満げに漏らした。

「黙れ河村！ お前には罰が下されて当然なのだ！」

竹田が吼えた。

「河村、お前の様な人間がいるから、私は苦しむ羽目になったのだ！ そもそも私は黒執事などに関わりたくはなかつた！ もつと壮大なスケールのアニメに関わりたかった！ 私が作りたかったもの、それは反米アニメであり、戦争に翻弄される人々を描く骨太な人間ドラマだったのだ！ それがどうした！ 黒執事なんてものは、所詮腐男子や腐女子向けの変態ショタコンアニメじゃないか！ 私は変態御用達のアニメを作るためにこの仕事をやつていいわけではない！ 黒執事なんぞ、糞食らえだ！ そういうときに出会つたのが、フラウロス様だ。フラウロス様は何でも協力してくれると言つ。願つたりかなつたり、渡に船とはまさにこのこと。そこで私は一計を案じた。お前を利用し、黒執事？の世界を滅茶苦茶に破壊する計画

竹田が狂つたように大笑した。

「竹P、お前もう正気じやねえな」

「その愛称をお前が使うことを、私は許さん！」

今まで笑いまくっていた竹田が豹変し、激しい怒りを露わにした。

「そうかそうか。そりや、悪かつたな」

竹田の顔がまた変化し、今度は笑顔を浮かべ始めた。

「いいことを教えてやろう。私はフラウロス様の献策に従い、ネットである工作を行つた」

「ネット工作？ 何をやつたとこうんだよ？」

「何、簡単なことだ。あるサイトにアクセスすると、お前たちがいる世界、つまり黒執事？の世界に飛ばされることになっていたのだ。しかも腐男子化・腐女子化・ショタコン化するようになフロウロス様がルシファー・ノートにお書き下さった。その世界では、腐男子・腐女子・ショタコンが大量発生していることになる」

「な、なんだつて！」

フラウロスの哄笑が館に大きく響き渡った。

「ショトリ、今すぐファンтомハイヴ邸へ俺を瞬間移動せろ！」

「了解だ。しかし、今からで間にあつかどつか」

「それ、を聞くのをやめさせることだよ。」

河村はトランシー邸から姿を消した。

竹田は大笑を続けた。

第十九章 これが世に言つ「ファントムハイヴ邸の戦い」である

ファントムハイヴ邸では大変な騒ぎが起きていた。突如として、大勢の人間が現れ、襲いかかって来たのだ。

「ここにいらっしゃうってんだ、どうから沸いてきた？」

バルドが舌打ちしながら、機関銃を操作する。けたたましい音とともに、弾丸が放たれ、襲撃者たちをなぎ倒す。不思議なことに、被弾した者、倒された者たちは姿を消していくのである。

「私にもわからないです。しかし、ここは私たちで坊ちゃんをお守りするです」

マイリンが一丁拳銃を発射しながら言った。射撃は正確で、眉間に打ち抜かれた者たちが次々と消えていく。

「そうだよ！ ここは僕らで守るんだ！」

フィニーが襲い来る者たちに突進し、手当たり次第に放り投げていく。

タナカも得意の柔術で襲撃者を倒していった。

「しかし、こうたくさんやつてこられては、きりがありませんね。はあ・・・・・」

セバスチャンが銀食器を投げつけながら、ため息をつく。

「進めである！ 進むのである！ 今こそ我々の宿願を叶えるとき
なのである！ 我こそは春雄、近藤春雄、ショタコンニーーートである
！ 春雄はここに集つた腐男子・腐女子・ショタコン諸君に命じる
のである！ 春雄こそがこの腐男子・腐女子・ショタコン軍団の總
司令官なのである！ 春雄はそれだけの戦闘能力と経験をもつてい
るのである！ 何としても、何が何でも、あらゆる手段を講じてフ
レントムハイヴの館を落とし、あんなことやこんなことをして、・・・
・・・・・フヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒ
落とすことさえできれば、欲望は思いのままとなるのである！ 進
めなのである！ 前進あるのみなのである！ 我々は何百人、何千
人、あるいは何万人もの兵数を誇る大軍であり、敵は少數なのであ
る！ この戦いはもはや我々の勝利が約束されたも同然なのである
！ 進めである！ 踏みつぶせである！ シエル、シエル、フヒヒ
ヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒ。シエルは春雄のもとなるので
ある。フヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒ

近藤は涎を垂らしながらも、全軍に演説をぶつた。涎を垂らして
いるのは近藤だけではなかつた。近藤率いる腐男子・腐女子・ショ
タコン軍の一員はみな、一様に思い思いの妄想に耽り、口元は涎で
汚れていた。

河村はそんな有様のフレントムハイヴ邸に瞬間移動した。

「もう始まつてゐるぢやねえか！ こいつらの狙いはシエルやセバス

チャンか！ セバスチャンは自力で何とかできるだらうが、シール
は俺が守る！ 「おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おおー！」

河村は近藤軍に向かつて駆けだした。とにかく田に入る敵を錘で
叩く。頭を打ち、喉元を突き、股間を叩き、腹や胸を打つ。

倒せども倒せども、敵の勢力は衰えない。そればかりか、敵の数
が増してきて、このような覚えさえ河村は感じた。

「突撃である！ とにかく突撃である！」

聞きなれた声が河村の耳に届いた。声の方角を見た。戦友の近藤
春雄がいた。

「春雄さん、こんなところで何やつてんだ！？」

河村は近藤に近寄り、向き合つた。

「ゼロ！？ なぜ！」

「話せば長くなるが、アロイスを倒すためこの世界に入り、いまさ
つき奴をぶつとばしてきたんだが、ファンタムハイヴ邸が危ないと
思つて、今はここを守るためにやつてきたんだ！」

「何！？ な、なぜ口は春雄の敵なのである！ はおおおおおおお
おおおおおおおおおおおおー！」

近藤が河村に張り手をかました。

「お、おこ、待てよ…」

河村は一歩後退して回避した。

「俺が春雄さんの敵？ 俺たち戦友だろ？ どうせまつたんだよ、春雄さん？」

河村は動搖しきっていた。

「フヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒ、春雄はシールと ッ
したいのである… それからこりこりと楽しみたいのである… そ
れこそが春雄の念願の夢なのである… それを阻むものはすべて敵、
排除させてもらひのである… ザロとい、例外ではないのである…
まあまあまあまあまあまあまあまあまあまあ…」

近藤が再び河村に襲いかかる。鋭い張り手の連続技だ。河村は錘
でそれを悉く受け止めた。

「春雄さん、正気に戻ってくれ… お願ひだ…」

「はまおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお…」

河村の懇願など無視して、近藤はなおも張り手を送り続けた。

「くつたー… じゅうがねえ、春雄さんいえども、手加減しねえ…
「おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお…」

河村は錘を振り下ろす。しかし、近藤はいつも簡単に受け止めて
見せた。

近藤は錘を力強くひつぱつた。

「おめでたす！」

河村の体は宙を舞い、大地に叩きつけられた。

「ゼロの負けなのである！　・　・　・　・　・　シエル、シエル、シエル、

近藤は河村を捨て置き、ファンタムハイヴ邸へ近付いていった。

第一十章 サタン・ノート

「いてえー！ 春雄さん、マジでぶん投げやがった

河村は背中をさすりながら、起き上がつた。近藤はといえど、館目掛けてまっしづりに突き進んでいた。

「待て、春雄さん！ 春雄さんは俺が止めて見せる！」

河村も駆けた。

「さつきから外がうるさいこと思つて来てみたら、これは何の馬鹿騒ぎだ？ こいつらは何者だ？ 僕に説明しろ、セバスチャン！」

シールがセバスチャンに説明を命じた。

「それがよくわからないのですよ、坊ちゃん。何やら突然現れ、襲いかかってきました

「よくわからない？ ならこいつらに直接聞いてみればいいだろ？ ？」

「それはもう試しました。しかし、ウヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘ
とか、フヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒとか、囁つだけでも
まるで意味をなさない言葉しか話せないのです」

セバスチャンは困惑顔で申し訳なさげに言った。

「フン。 気味の悪い連中だ。 頭がどうかしてるようだな」

「ええ。 それ」「どうやつが坊ちゃんや私が田舎のようなのですか」

「何だと？ それは本当か？」

シエルは眉間に皺を寄せて言った。

「うわざのように坊ちゃんや私の名を言ひてこましたか？」

「ますます氣味が悪いな。 セバスチャン、命令だ、こいつらを全員殺せ」

「マイヒス、マイローデ」

セバスチャンが畏まつて答えた。

近藤はシエルの姿を認めた。

「シエルー やつと会えたのであるー フビヒヒヒヒヒー」

近藤は狂喜した。 口からは涎をまんべんなく垂れ流し、大きく口を開けたその顔は、まぬけ面と言つて差しつかえなかた。

「春雄ー！」

背後から近藤の名を呼ぶ者があった。近藤は振り返った。

そこにかつての戦友、ゼロ」と河村英樹の姿があった。河村は錘を大きく振りかぶっている。

近藤はシエルを遠田からでも捕ることができた喜びに支配されおり、とっさに体を動かすことができなかつた。

錘が振り下ろされ、近藤の頭を碎いた。その瞬間、近藤は姿を消した。

「春雄さん倒しても何も変わんねえじゃん！」
「春雄さん倒しても何も変わんねえじゃん！」
「春雄さん倒しても何も変わんねえじゃん！」

「それはそうだ。大本を断たない限り、この事態は收拾できない」

「大本を断つたって、何をどうすりやいいんだよ？」
「大本を断つたって、何をどうすりやいいんだよ？」

「知れしたこと。フラウロス、竹田、田村の三名を倒すのだ

「そんなこと言つたつて、俺やお前はこの世界に閉じ込められて出られないんじやねえのか」

ショトリが懐から紙きれを取り出した。

「「これは何だと思つ?」

「何つてただの紙じやねえの?」

ショトリは首を横に振つた。

「これはサタン・ノートだ。魔王陛下から頂戴したものだ」

「サタン・ノート! そんなもんまであんのか!」

「ある。六六六六万四のゴキブリを生み出す」とと引き換えに、手に入れた。これを使えば、この状況を開拓することはないともたやすい。ルシファー・ノートの効果も打ち消すことも可能だ」

「そんな便利なもんがあるんなら、初めから使つてくれよな

河村が不満げに呟いた。

「切り札は最後まで大事にとつとおくべきだとは思わないか? 簡単に使つてしまつては、面白味に欠ける」

「またお前のポリシー聞かされるのか。もうこいからや、とりあえず、こいつらなんとかしてくれよ」

河村は腐男子・腐女子・ショタコン軍を指差して言つた。

「それは断る。お前は直ちにお前が元居た世界に戻り、竹田と田村を倒すのだ。フランコスの方は俺が何とかする。それでは、お前を

飛ばすぞ」

シユトリがサタン・ノートに書き込んだ。

「オッケー。あと、どうでもいいけど、ゴキブリ六六六六万匹と交換とか、すぐえくだらねえ話だな、おい。サタンて奴はどうかしてんじやねえのか？」

シユトリは河村の問いに答えなかつた。次の瞬間には河村の姿は消えていた。

第一十一章 新撰組パワー

竹田邸にフラウロスの驚愕の声が轟いた。

「サタン・ノートだと…？ まさか奴が持っていたとは…？」

予想外の展開にフラウロスはうろたえしきっていた。

「フラウロス様、我々の計画はどうなるのです！？」

竹田も焦り始めた。そうなると、田村も落ち着かない。

「二人とも、顔色が悪いぜ？ 流行りの熱中症にでもかかったか？」

三人をあざ笑うかのように、河村が現れた。

「か、河村！」

竹田が度肝を抜かれたようだ。

「竹田青滋！ 黒執事シリーズの企画者でありながら、黒執事ファンを悪用し、自ら関わった作品世界を破壊しようとしたその罪、俺は許さねえ！ それに田村ゆかり！ お前もお前だ、出演したアニメを壊そなうなんて、自分で自分の首を絞めていることに気がつかないのか！」

河村が錘を田村に向ける。

「ひつ！」

田村は情けない声を上げて失神してしまった。

「河村英樹！ お前如きに私の気持ちがわかつてたまるものか！ 私はな、反米アニメ・戦争アニメを描くことだけが生き甲斐なのだ！ 壮大なスケールの物語に関係し、視聴者に多大な影響を与える！ それこそが企画者としての何よりの喜び！ それなのに、あんな腐男子・腐女子・ショタコノアニメを私に企画させた連中は、頭がどうかしているんだよ！ 私は確かに力をもつているんだよ！ 世界を変える力を！ アメリカの一極支配を粉碎する力が、私にはあるんだ！ ・・・・それなのに、黒執事んかやらせやがつて！ ・・・・私の気持ちがわかるか！ わかるかと聞いているんだ、河村英樹！」

竹田は時折唾を飛ばしながら、自らの思いを熱く語った。

しかし、河村には賛同できるものではなかつた。

「わかんねえなあ、竹P。ニートの俺がとやかく言つのもおかしいが、仕事は仕事で割り切つてやらねえといけないと思うぜ？ 嫌ならやめればいいし。それが大人の態度つてもんじやねえの？」

「な、何を！ ニートの分際で、生意氣な！ フラウロス様、早々にこやつをぶちのめして下せこませ！」

竹田が天井を見上げて言った。

「いいだろ？ 今からそこには黒執事ファンで屈強な者を六人送る」

六人の男が現れた。それぞれ筋肉隆々で、スポーツや武術で体を鍛えていた男たちばかりだった。

だが、河村は物おじしなかつた。極めて冷静な態度で、ラジカセにCDをセットした。

「ショトリ、バックアップは任せたぜー！」

「わかった

天つ風よ 時の羽さえ

この思ひは十六夜に

凛とした あなたと同じ

手折られる花 色は匂えど

言の葉も届かないまま

憂う枝から消えた

流れているのはテレビアニメ「薄桜鬼」オープニングテーマ「六夜涙」である。

河村は六人に向かつて走つた。

河村は飛びあがつた。

「……はい、あなたたまたまわざりありますよ。」

最初に目に入った男の顔目掛けて、飛び蹴りをお見舞いした。男はうめく間もなく床に昏倒した。

二人目はパンチを繰り出してきた。河村は的確に回避し、脇腹に拳を連續で殴打する。二人目も床に転がつた。

三人目は突進してきた。河村はそれも避け、三人目の首筋に手刀を叩きこんだ。三人目も眠ることとなつた。

四人目は蹴りを送つて來た。それも器用に避け、四人目の足が虚しく空を切つたところを、股間を蹴つた。四人目は股間を抱えて両膝をついた。

五人目はパンチとキックを交互に繰り出した。河村は徐々に後退していく。

五人目は河村が防戦一方になつたと見て、ますます攻勢を強めた。

河村は壁に背中をついた。それを見て、五人目は余裕の笑みを浮かべた。

「しゅわっち！」

河村は壁を蹴つて飛翔し、五人目の胸に蹴りをめり込ませた。五人目は床に背中を打ちつけ、気絶した。

六人目は何を思ったか、竹田のパソコンを手にとつて、河村に殴りかかつて來た。

「あ、おい、それは私のパソコンだぞ！？」

竹田は突然の出来事にあっけにとられていた。

河村は素早く動いた。六人目がパソコンを振り下ろす前に、その喉に拳を打ちこんだのだ。六人目はパソコンを手から落とし、喉を押さえ、床に転倒した。

「な、なぜだ！ なぜ筋肉男たちが六人も、こんな肥満体の男に敗れるのだ！？」「これはどういうことなんだ！？」

竹田は動転し、視線が定まらない。

「言つたじやねえか、これが新撰組パワー、もつと言えれば、アニメパワーなんだよ」

河村はにやりと笑つて言つた。

「次はお前がやられる番だぜ、竹P」

河村は竹田を睨みつけ、言った。

「フ、フラウロス様、なにとぞ私にご助力願います！」

「無論だ。シユトリの手先に敗れてなどなるものか」

竹田に異変が生じた。わけもなく感情が高ぶり、体中から力が漲つて来た。

「…………」

竹田が唸り声を上げ、河村に向かつて駆け出す。

「俺も負けるわけにはいかねえんだ！」
おおおおーー！」

河村も駆けた。二人は拳と拳をぶつけ合つた。力はほぼ互角。

「私はなあ、米帝を倒すという大切な使命があるんだよ！自分が企画したアニメを使ってな！ これは私にしかできないことなんだ！ だが河村、お前には何か使命があると言うのか？ ニートに過ぎないお前に何の目的がある？ お前は何のために生きている？ 人生についての何の目的もなく、毎日を無意味に、無意義に、無駄にだらだらと消費しているだけのお前らニートなんかに、アニメ史に名を残す、この偉大な私が敗れ去ることなど、本来あつてはなら

河村も負けじと言い返す。一人は殴り合いを続けるが、いずれも拳や足をぶつけ合うことだけに終始していた。

「目的だあ？ まづはお前を倒してから、漫画の新刊読むことへりいかな」

竹田は床を飛び、蹴りを繰り出した。河村は右に体を動かした。

河村が居た場所に竹田の右足がめり込んだ。床が破壊され、竹田の足が挟まっている。

「はまつてやがんの」

河村がからかつた。

「何の！ そんなもの、すぐに抜いて見せる！ なに！」

竹田が「くら足を引き抜」うとしても、びくともしない。

「…、これはどうしたことですか、フラウロス様！」

竹田の顔が一気に青ざめていく。

「これまでだ、竹田。ルシファー・ノートが文字で埋め尽くされ、もう書けなくなつたのだ。ルシファー・ノートが使用不能になつた以上、役職や階級が上のシユトリに、俺は対抗する手段はない」

「そ、そんな！」

「勝負あつたな、竹P」

河村が悠然と竹田に歩み寄る。

「「」、これは夢だ！ そうだ！ 夢なんだ！ 私は何か悪い夢を見ているに違いない！」

竹田は自分の頬をつねつてみた。

「おかしい！ 夢のはずなのに、ひねると痛いじゃないか！ これはどうこいつことなんだ！ 誰か教えてくれ！」

竹田は絶叫していた。それは魂の咆哮であった。

「自分が認めたくない現実を悪夢だと決めつけても、何も変わりはない。そんなこと、本当はお前だつてわかつてんだる、竹P？」

そんな竹田の首筋に河村は手刀を叩きこんだ。竹田は気を失い、床に崩れ落ちた。

竹田が倒されたさまを見て、呆然自失している者がいた。フラー口スである。彼は魔界で放心状態にあつた。

フラウロスは肩を叩れた。叩いた主は、魔界の副王ルシファーであった。

「フラウロス、お前またシユトリの奴に負けたんだって？ 魔界中の噂になってるぜ。せっかく俺がノート半頁やつたのに、負けやがつて、お前どうこいつもりだよ？ とりあえず、ノートは没収な

ルシファーはフラウロスから半頁のノートをひつたくつた。ルシファーの掌でノートは燃えた。

「そんなに俺の顔に泥塗りたいか？ え、どうなんだよ？」

「申し訳ございません。決して陛下の御顔に泥を塗るつなどとは、
露知らず」

フラウロスは口を絞り出して返答した。

「結果的にそうなつてんじやんか。俺までみんなの笑いもんだよ。
どう責任とつてくれんだよ、おい？」

「…………なんなりと、御用命令下さいませ」

「ああ、わう。じゃあさあ…………」

ルシファー・ノートが燃えたことにより、ノートに書かれた事柄も効力を失い、黒執事？の世界に大量に送りこまれた人間たちも、人間界に戻つていった。こうして黒執事？の世界は再び平穏を取り

戻した。

河村は自宅に戻つて來た。戻つてくるなり、風呂に入り、シャワーを浴びた。その後、着替えをしてから本屋に行き、買ったかった漫画の新刊を購入した。

「やつと読めるぜ」

河村は自室で寝こりび、漫画本を読み耽りながら、呟いた。

終

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6556m/>

『黒執事?へGO!』

2010年10月8日11時31分発行